

1年生学年だよ

令和4(2022)年1月11日(火)
島本町立第二中学校
校長 松本 剛
1年生 学年 教員

新たな一年の始まり、飛躍の予感…

新年、明けましておめでとうございます。中学生として初めて迎えた年末年始は、いかがでしたか。何年たっても、一年の始まりは清々しく、気が引き締まるものです。「さあやるぞ」と何らかの目標を立てた人もいることでしょう。その決意を忘れず、時間をかけて努力を積み重ねてほしいものです。自ら掲げた目標の達成に向け、高みを目指した言動を心がけましょう。



努力

武者小路実篤

毎日毎日
同じ生活をしている
自分の仕事にとっつかれている
うまくゆく時も
うまくゆかぬ時もある
運のいい時も わるい時もある
うまい話はあるわけではない

私は
こつこつと自分の仕事をしている
そのうちに自分の努力は
見えないうちに段々ものになる
沈黙の一年の努力
三年の努力 五年 十年
二十年 三十年の努力
誰にも見えない努力
だがその努力こそ
自分を段々ものにするのだ

さて、『一年生の三学期は、二年生の〇(七)学期』とよく言われます。つまり、この時期は一年生のまとめだけでなく、二年生への準備期間であるということです。新学年を順調にスタートさせるための「助走期間」と言ってもいいでしょう。入学以降、「自分は何ができるようになったのか」「どんな二年生になりたいのか」「今やるべきことは何か」など、自分と向き合い、自分を知る大切な時間にしてください。

未だ、見通しのつきにくい世の中だからこそ、豊かな心と多面的多角的な視点を持ち、“変化に対応できる力”が必要です。引き続き大切にしてほしいのは、「他者を思いやり、ともに高め合う」こと。一人ひとりが学級や学年の一員であり、それぞれの発言や行動が、その場の雰囲気を作り、ともにたくましく成長できる時間を過ごしましょう。今後もチャレンジ精神をもって、さまざまな取組に臨んでほしいと思います。

ところで、今年の干支(えと)は「壬寅(みずのえとら)」だそうです。60年に一度のこの年は、『陽気を孕(はら)み、春の胎動を助く』と言われ、「冬が厳しいほど春の芽吹きは生命力に溢れ、華々しく生まれる年になる」とのことです…。つまり、「春の胎動が大きく花開くためには、コツコツと地道な自分

磨きを行い、実力を養う必要がある」ということを指し示しています。

何はともあれ、希望に満ちた一年になりそうです。

三ヵ月後には「先輩」となる君たちへ…飛躍のときがきた！

1月13日(木)は、チャレンジテスト！

- ◇みなさんの学力の状況をつかむことで、教育の成果と課題を明らかにし、今後の教育にいかします。
- ◇みなさんが自分の学習の到達状況を正しく知ることにより、自分の目標を持ち、その向上への意欲を高めます。
- ◇大阪府教育委員会が、調査結果を使って、大阪府公立高等学校入学者選抜の調査書に記載する評定が、公平性の高いものであるかどうかを確認する資料を作成し、学校に提供します。



1限目：国語 2限目：数学 3限目：英語 4～5限目：特活

この日は5限まで

何事にも前向きに取り組む1年生、チャレンジテストにも全力で臨もう！

☆「福祉体験学習」本格実施へ！☆



先月の22日、「福祉体験学習」の導入授業がありました。三学期は、その内容を深めていきます。今回の学習では、ともに暮らす高齢者や障がい者など、さまざまな人たちの立場や思いを知り、理解を深めることで、「誰もが暮らしやすい社会」について考えます。みなさんは、『ノーマライゼーション』という言葉を知っていますか。高齢者や障がい者が、「他の人と共に助け合いながら暮らしていくのが正常な社会のあり方である」とする考え方です。また、そのための社会基盤や福祉政策などを整備していく考え方を指します。

『福祉』とは「しあわせ」や「ゆたかさ」を意味する言葉です。“祉”の字は「祉い(さいい)」と読み、個人的な幸せを「幸い」と表すのに比べ、社会全体の幸せを「祉い」と捉えるそうです。

みなさんにも、福祉を身近なこととして捉え、社会に役立つことの大切さに気づいてほしいと思います。将来を担う自分たちにできることは何か、今回の学習を通して一緒に考えていきましょう。次回は1月17日(月)の予定です。

1月17日、阪神淡路大震災(兵庫県南部地震)の記憶を伝える

1995(平成7)年1月17日、午前5時46分。淡路島北部を震源としたマグニチュード7.3の直下型地震が発生しました。校外学習で訪れた神戸のほか、西宮、宝塚、淡路島などで震度7を記録。死者6434人、負傷者43000人以上、約25万棟の住宅が全半壊するなど、他府県も含め阪神地方一帯に甚大な被害を与えました。



震災後、一時は30万を越える人々が避難生活を強いられました。一方で、「ボランティア」という言葉が多く聞かれたのもこの時期で、「助け合い」「支え合い」の精神やその必要性が世の中に広く認識されるきっかけにもなりました。

このときの大震災は、今を生きる私たちにとって多くの教訓と課題を残しました。あれから27年、過去に犠牲となった命を決して無駄にしてはならず、「昔のこと…」と風化させてはなりません。とりわけ関西に暮らす私たちにとっては、永く後世に語り継いでいかなければならない出来事です。

私たちが住む日本では、いつでもどこで地震が起きても不思議ではありません。また、人間の力では、地震や台風、津波などの自然現象に抗うことはできません。しかし、私たちの考え方や行動でそれらからの被害を最小限にとどめることはできないでしょうか。日頃から防災や危機管理への関心を高め、自分や大切な人の「命と生活」を守るために、情報収集や緊急避難および連絡方法を考える機会としてください。

